

厚生科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)
心身症、神経症等の実態把握及び対策に関する研究
分担研究報告書

分担研究 心身症、神経症等の実態把握に関する研究(分担研究者 奥野晃正、衛藤 隆)

1-C 子どもの心について日本小児科医会の取り組み

研究協力者 保科 清 日本小児科医会「子どもの心」対策部 担当常任理事

はじめに

子どもの心の問題が次第に表面化してきた平成9年に、子どもの心の問題に小児科医として積極的に取り組むべきではないかという天野会長の意見で、日本小児科医会として取り組む方法について検討を開始した。

実際に学校などで問題となっていることは、その基となるものが家庭生活から発生していることが数多くみられる。

家庭生活上で培われる子どもの心の発達に重要な年齢は、主に乳幼児期にあるという基本的な概念で検討することになった。

問題点が多岐にわたるため、長期的視野での対応と短期的視野での対応に分けて、検討することにした。

長期的視野での対応

長期的視野では、これからの子どもの心をいかに健全に発達させられるか、その方法と対策について検討することが必要である。

そこで医師以外の心理学分野とか作家などの方々を専門委員として意見を聞くとともに、関連分野の日本医師会、日本小児科学会、日本小児保健協会、日本母性保護産婦人科医会、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、NHKなどからオブザーバーとして参加していただき、問題点の洗い出しから開始した。その結果は、「全体会議のまとめ」として作成中である。

検討された問題点に対する小児科医の対応については、これから検討することになっている。

少子化の進む中で、少ない子どもをいかに質の高い子どもの心へと発達させるか、課題は多方面にわたるとともに、重要な問題を含んでいる。

一般市民と同様に、小児科医の意識改革も必要となることが考えられる。

子どもの心の発達には、成長に伴って必ずいろいろ

んな通過点があるので、その本筋はあくまで大事にしていかなければなりません。

大変難しい問題もありますが、小児科医として、子どもの成長を考えながら対応できることも多いと考えている。

短期的視野での対応

現在問題となっている子どもの心に、いかに対応するか。

学校などで問題になることの多くは、その基となるものが家庭生活から発生していることが数多くみられる。家庭生活上で培われるべき子どもの心の発達に重要な年齢は、主に乳幼児期にあると考えられる。そのような年齢の子どもとの接触が多いのは、小児科医である。その子どもの親や生活環境も、大体を知っている。養育環境を知りつつ、育児の上での問題に少しずつでも対応していけば、子どもの心の問題を解決されて行くであろうと考えた。

現実に起こっている子どもの心の問題に対する対応について、会員である地域の小児科医が、できるだけ統一性を持った対応をしていかなければならない。

そこで「子どもの心」研修会を開催し、子どもの心についての基本的な概念と対応を修得してもらい、現実問題に対応してもらおうことにした。

研修会を受講された小児科医は「子どもの心相談医」として登録され、各地の事情や生活環境を考慮しながら、学校やスクールカウンセラー、児童相談所などの行政機関などと連携を保ちつつ、現実問題に対応してもらえよう。

学校医の多くは、小児科医ではない。しかし、地域の小児科医が学校医でなくても、より積極的に活動と連携をしてもらえれば、少しでも問題解決への道筋が開けると考えている。

以上のような目的で、平成11年6月と7月に、計4日

間の第1回「子どもの心」研修会を開催し、最終的に「子どもの心相談医」として登録された小児科医は、全国で452名で、少なくとも各県に最低3名以上の相談医がいることになる。

研修会を毎年開催して、より多くの小児科医が相談医となってもらえるように努力するとともに、5年ごとの登録更新までに再研修を受けることで、その質を維持していくことになっている。

平成12年度も、6月と7月の第2土曜日曜を使って第2回「子どもの心」研修会を開催することが決まっている。

まとめ

子どもの心の問題に対する小児科医としての対応には、長期的視野と短期的視野での対応を必要とする。

長期的視野での対応は、基本的な子どもの心の発達をいかに健全にできるかを検討しなければならない。

短期的視野での対応は、現実に行っている心の問題にいかに対応するかが問題である。

これら2つの対応は、時間がかかっても小児科医が地道に実行できる体制を築いていかなければならないと考えて、日本小児科医会は活動を開始している。